

随想

六十五年後の わだつみのこえ

大 滝 浩 道

『きけわだつみのこえ』第1集の冒頭の遺書を読んだことのある人は多いと思う。

私も二十代のころに読んで以来、四十数年を経たいまでもこの遺書の断片を記憶している。

それは単に冒頭にあつたから記憶していたのではない。その人、上原良司の遺書の「明日は自由主義者が一人この世から去って行きます」と言う一文が心に残つたからである。同書の経歴によれば、彼は1922年(大正11)に長野県安曇野に生まれ、43年(昭和18)に慶応大学を卒業して、この年の12月に入隊。45年(昭和20)5月11日、陸軍特別攻撃隊員として沖繩嘉手納湾の米機動部隊に突入戦死している。享年二十二歳であつた。

また彼は同遺書のなかで、独伊の敗戦を念頭に「全

体主義の国家は、一時的隆盛であろうとも、必ずや最後には敗れることは明白な事実」とも述べている。さまざまな時代的な制約の中で、彼、上原良司の知性が正確に時代を見据えていることに感動する。

ところが最近、たまたま茶道雑誌『なごみ』(2010年6月号)を見ていて、再び上原良司の名前を目にした。同誌に掲載された俳人、宮坂静生の「梅雨の青霧」の一文がそれである。私は俳句に疎いので宮坂について詳しくは知らないが、同氏は最近、正岡子規の門下として著名な俳人、上原三川の研究のために安曇野の上原家を訪れたと言う。

戦死した上原良司は同三川の孫にあたるという。

宮坂によれば、「男三兄弟、長男良春、次男龍男、三男良司がいずれも戦死し、その飾られている胸像に接し、衝撃をうけた」と書いている。

宮坂は一句を捧げている。

わたつみにみたりとられし夏爐守

宮坂静生

(おおたき こうどう・所員)